



報道関係者各位

2021.1  
福田美術館

## 「栖鳳の時代 ～句いまで描く」 企画展開催



竹内栖鳳（1864-1942）は、伝統文化を千年以上に渡って育んできた街・京都が生んだ日本画の天才です。幕末に起きた戦火で中心地が焼け野原と化したことに加え、天皇が江戸へ居を移したことにより、明治維新頃の京都は荒廃していました。そんな時勢のなか生まれ育った栖鳳は、まず江戸時代から続く日本画の技法の中でも主流であった四条派の絵を学びました。その後、円山派や狩野派、南画など他の伝統的な画風をも身につけ、さらにはターナーやコローなど、当時最新の西洋画や写真の要素までも貪欲に取り入れます。

また栖鳳が目指したのは「省筆」という描き方。それは対象の全てを丹念に写し取るのではなく、選び抜かれた筆の跡のみ画面に残すというもの。画面上にとられた余白は人々の想像力に訴えかけ、栖鳳が生涯愛した俳句の世界に通じるものがありました。

本展では、句いや音・湿気までもが感じられると言われ、一世を風靡した栖鳳の動物画と風景画の大作をはじめ、師匠の幸野楳嶺（1844-1895）や四天王と称された同輩たち、個性豊かな教え子らの作品もご紹介します。

かつてアトリエがあったここ嵐山で、栖鳳たちが駆け抜けた時代の息吹を感じて頂ければ幸いです。

日時 2021年2月13日(土)～2021年4月11日(日) ※緊急事態宣言を受けて変更の可能性があります  
10:00～17:00 (最終入館16:30)

休館 毎週火曜日 ※但し2/23(火・祝)は開館、2/24(水)は休館

料金 一般・大学生 ¥1,300(1,200)/高校生 ¥700(600)/小中学生 ¥400(300)

障がい者と介添人1名まで ¥700(600)

※()内は20名以上の団体

主催 福田美術館・京都新聞

## 第1章（1Fギャラリー）／京都画壇の革新

円山応挙を祖とする円山派と、その弟子・呉春に始まる四条派。その両方を受け継いだ画家である幸野楳嶺(1844-1895)は教育者としても名高く、多くの才能ある弟子たちを育てました。その中でも竹内栖鳳(1864-1942)、菊池芳文(1862-1918)、都路華香(1871-1931)、谷口香嶠(1864-1915)は四天王と呼ばれ、近代京都画壇の隆盛に貢献しました。栖鳳は楳嶺の下で円山・四条派の画技を修めた後、京都府画学校では狩野派や雪舟の筆法、南画までも模写して学び、それらを自在に組み合わせることで新しい日本画を作り出そうとしました。その作風は様々な動物が混ざった妖怪に例えて「鶴(ぬえ)派」などと批判もされますが、彼は屈することなく探究を続け、渡欧して西洋絵画を目の当たりにし、その要素を取り入れます。帰国後発表した作品は「匂いまで描く」と称賛され、その地位を確立しました。第1章では、京都画壇を再興し新しい時代を築いた5人の巨匠の作品と、当時栖鳳に刺激を受けた京都市立美術工芸学校の画学生たちによる動物画なども、併せて展示いたします。



左から、竹内栖鳳「金獅図」 幸野楳嶺「蓮華之図」 西山翠嶂「悉達發心図」 都路華香「好雨帰帆図」(部分)

**展覧会担当学芸員：中村七海（なかむらななみ）**

**作品総数：60点／初公開作品：21点**

※期間中一部展示変えあり

## 第2章（2Fギャラリー）／憧れの栖鳳先生

～日本画は省筆を尚（とうと）ぶが、十分に写生をして置かず描くと、どうしても筆数が多くなる。写生さえ充分にしていれば、いるものといらぬものとの見分けがつくので、安心して不要な無駄を棄てることができる。〈『国画』2巻9号 昭和17年(1942)〉

栖鳳は徹底した写生を行った上で厳選された線のみで描く「省筆」を用い、対象の本質に迫ろうとしました。また、絵の中の余白の取り方などの表現についても、たゆまず探究し続けました。

～東洋流系の絵画は、画面に描かれた部分だけが全部とされないで、余白をも絵の一部と解釈されている。余白のあつかい方で、絵が生きもすれば死にもする。〈『国画』2巻9号 1942年〉

第2章では、栖鳳が極めた省筆と余白が印象的な作品を中心に展示します。また、栖鳳に学びつつ独自のスタイルを確立した、橋本関雪、徳岡神泉、村上華岳ら個性豊かな弟子の作品もご紹介いたします。



左から、竹内栖鳳「水風清」 竹内栖鳳「水邨驟雨図」 橋本関雪「後醍醐帝」 富田溪仙「風師雷伯」（部分）

## 第3章（2Fパノラマギャラリー）／青の部屋

海や川、深い山々など、日本の自然を描くために青は欠かせない色です。古来日本では緑色も青と呼んでいました。第3章では栖鳳が群青で表現した穏やかな海の作品と共に、小野竹喬《黎明》や、池田遙邨《灯台道》など、栖鳳の弟子たちの中でも、青がとくに印象的な作品を特集します。また日本画の絵の具の中でも希少な群青・緑青の絵の具の実物を展示。栖鳳が活躍した当時の絵の具もご紹介いたします。



プレス用画像一覧

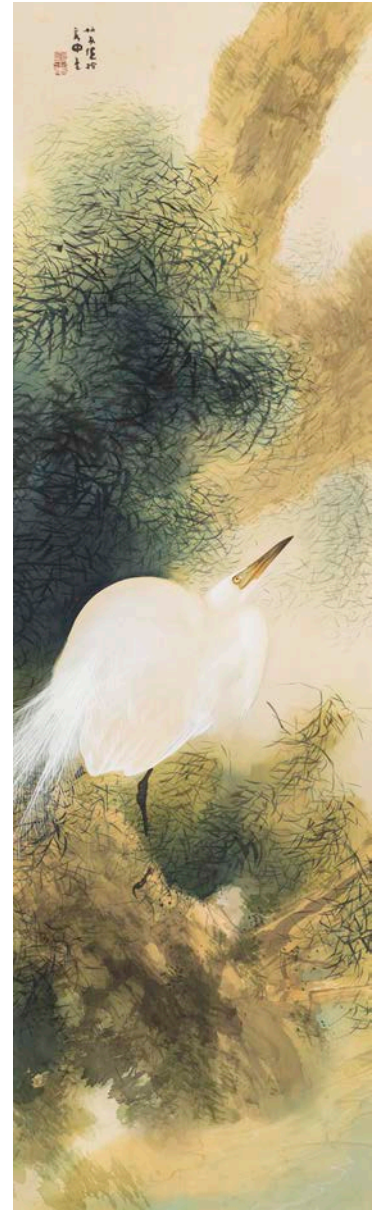
01.\_ 竹内栖鳳「猛虎」  
(通期展示)



02.\_ 幸野楳嶺「蓮華之図」  
(通期展示)



03.\_ 竹内栖鳳\_水風白鷺  
(通期展示)



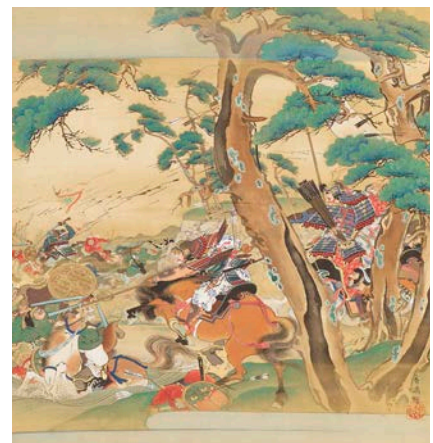
04.\_ 西山翠嶂「悉達發心図」  
(通期展示)



05.\_ 都路華香「好雨帰帆図」  
(通期展示)



06.\_ 谷口香嶠「古聖帝名臣画冊」  
元寇 (通期展示)



プレス用画像一覧

07.\_竹内栖鳳「金獅図」  
(通期展示)



08.\_竹内栖鳳  
「海光清和」  
(通期展示)



09.\_村上華岳  
「墨繪牡丹圖」  
(通期展示)

10.\_橋本関雪「後醍醐帝」(通期展示)



11.\_竹内栖鳳  
「水風清」  
(通期展示)



12.\_竹内栖鳳  
「富嶽」  
(通期展示)



## 福田美術館について

### 美しい自然と日本美術の融和。日本文化の新たな発信拠点として

美術館の建つ京都・嵯峨嵐山は古来歌枕でもある場所で、多くの貴族や文化人に愛され芸術家たちが優れた作品を生み出す源泉となってきました。

福田美術館は、「100年続く美術館」をコンセプトに、現代まで受け継がれてきた日本文化を次世代に伝え、さらなる発展へと繋ぐ美術館を目指します。

オーナーである福田吉孝は京都に生まれ育ち、そこで事業を興し、今日まで続けてきたことに対し、地元の方々のご支援とこの地に恩返しをしたいという思いから、2019年10月、美術館の設立に至りました。

今や日本国内だけでなく、世界中から多くの人々が訪れる観光地である嵐山。その中でも渡月橋を望む大堰川（桂川）沿いの景勝地に位置し、四季折々でそれぞれに変化する風景は1000年変わらず人々を魅了する。この美しい自然とともに日本美術の名品を愉しむことで、嵐山が世界有数の文化発信地となることを願います。



### 嵐山にふさわしい、未来へむけた日本建築の形

福田美術館の建築を手掛けた安田幸一氏は、「蔵」をイメージした展示室や外の自然とのつながりを感じられる「縁側」のような廊下など、伝統的な京町家のエッセンスを踏まえつつ、これから100年のスタンダードとなるような新しい日本建築を目指しました。

また、庭には大堰川に連なる水鏡のごとく嵐山を映し出す水盤が設けられており、渡月橋が最も美しく一望できるカフェからは最高の眺めを味わうことができます。



## 福田美術館概要

- 名称：福田美術館／Fukuda Art Museum
- 住所：〒616-8385 京都府京都市右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町3-16
- 電話番号：075-863-0606（FAX）075-863-0607
- メールアドレス：[info@fukuda-art-museum.jp](mailto:info@fukuda-art-museum.jp)
- ホームページ：<https://fukuda-art-museum.jp>



- 敷地面積：1982㎡
- 延床面積：1193.58㎡
- ・ 展示室1／151.2㎡
- ・ 展示室2／175.4㎡
- ・ 展示室3／64.5㎡
- 交通アクセス：
  - ・ JR山陰本線「嵯峨嵐山」駅下車、徒歩12分
  - ・ 阪急嵐山線「嵐山」駅下車、徒歩11分
  - ・ 嵐電（京福電鉄）「嵐山」駅下車、徒歩4分



## 本展に関するお問い合わせ

福田美術館 広報事務局（ウインダム内）

TEL 03-6661-9448 FAX 03-3664-3833

Email [fukudamuseum@windam.co.jp](mailto:fukudamuseum@windam.co.jp)

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町1-28-9-4F

「福田美術館」広報事務局

担当：沼澤、多田